

＜公開ゼミ「障害児・者」問題試論＞のご案内 再会と新しい出会いを願って

**いま、ここで、在日コリアンと在日日本人の関係を振り返る
～それぞれの和光大学時代前後から～**

私（篠原睦治）が和光大学を定年退職してから、早や8年が経とうとしている。退職のときから、当時のゼミ学生たちなど、在職中に処々で出会った人たちの支えと協力で、年一度の〈開いた〉ゼミを開催してきた。ありがたく喜びでいっぱいだ。

今回は、上記タイトルで行うが、「在日コリアンと在日日本人」は、いまのところ、私が負っている言葉である。つまり、私は日本列島の一角に在住してきた「日本国民」である。私が在職中に出会い、今も何かと一緒に考えることがある**朴麻衣(パク・マイ)さん(1986年、人間関係学科入学)**と**梁進成(ヤン・チンソン)さん(1988年、同学科入学)**に、今回、**話題提供をお願いしたが**、おふたりとも、現在、在日韓国人三世である。北朝鮮に親族関係を持ち、以前には、同国にアイデンティティを持っていた経過がある。

私は、ある時期、「在日韓国・朝鮮人」と言っていたが、「分断国家」を前提とした、ご都合主義的な政治的言語にも思えてきた。当面は、「在日日本人」中心社会に在住する「在日コリアン」と表現しておく。

和光大学時代の**朴さん、梁さん**にも、日本人、そして同胞としてのコリアンとの出会いがあった。それらの関係では、対立、葛藤だけでなく、国家、国民、国境の枠を超える、生身のひと同士の友情、信頼関係も生まれたにちがいない。私が解きたい今日的テーマは、「国家・国民」ということを反省的に自覚しつつも、それらの境界を越えて、相互的な人と人の関係を模索することなのだが、おふたりをはじめ、皆さんと一緒に語り合いたい。

今回の〈公開ゼミ〉で、おふたりには、和光大学時代前後から話し出してほしいとお願いしているが、会場では、在日コリアン、在日日本人、その他の地域出身の人々が、一人一人の体験と考えを重ね合わせていくに違いない。語らいを進める中で、順次、今日の韓日・朝日関係の重い問題も語り合えればと願っている。

日時 2016年11月27日(日) 12:30～17:00(受付開始 12:00)

会場 和光大学H棟404号室(小田急線鶴川駅下車 徒歩15分)

問い合わせ先: 榎本達彦(1973年人間関係学科入学 E-mail: eno3@ge.meisei-u.ac.jp Tel 090-8345-3988)。小林(旧姓 瀬川)陽子(1989年人間関係学科入学 できれば E-mail: solina201263@yahoo.co.jp で。Tel 090-9156-9905)

追記: ①会場準備のため、余裕のある方は、11:00に上記会場にお集まり下さい。②ゼミ終了後、**18:30から、酒屋屋「なまはげや」(鶴川駅から徒歩1分 近藤ビル4F Tel 042-735-8204)で、交流会**を開きます。会費 3500円。和光大関係者ということで特別サービスとの由。当日、飛び入り歓迎ですが、できれば11月18日までに、上記小林宛に参加予定をお知らせ下さると助かります。③大学の駐車場(キャンパス入口の左側傍)を希望する方は、11月18日までに、上記榎本宛に、氏名、車種、車両ナンバーをお知らせ下さい。

この機会に感謝し語らうことを楽しみに 梁進成

私は鉄道旅行が大好きで、この文章も「鉄道唱歌」のオルゴールを聴きながら書いている。またジブリファンでもあり部屋は模型やグッズであふれかえっている。お酒も大好きだ。ほんとはそれだけに特化して過ごしたいが、以下の事からいろいろと考えざるをえない。

幼い頃、在日朝鮮人（以下、在日）が集まった中で育ったので、わずかながらに朝鮮語を使えたが、失明により民族学校に受け入れてもらえず、盲学校に入学し、以後は日本人の中で生活する事となる。

また16歳の時に家が引越し、以降、在日と接する機会が無くなってしまい、文化や歴史を知らないまま成人を迎え、自分はほんとに在日なのか？そうであるならアイデンティティをしっかりとっておきたい、だとすればどうすればいいのか？と言う自問自答を繰り返していた。

そこで在日について学ぼうと和光大学に入学する。民族的知識を身につける事により、在日と日本人の関係についても語り合いたいと期待した。悔いが幾つも残る4年間だったが、今回、機会を頂けた事に感謝している。今でも日本語しか使えず、民族的知識も十分ではない。なによりあの頃、自分を周囲の人たちにどこまで開いてきただろうか。今回、素直に打ち明けることで、「在日と日本人の関係」について話し合えるのではと楽しみにしている。

また今夏ピョンヤンに行き、11年ぶりに兄に再会、甥の子供とも初対面した。母が逝って6年経ったが、墓参りが出来、ほっとしている。「近くて遠い国」とはよく言ったもので、何故もっと早く訪問出来なかったか？と正直悔しい。

当日、これらについて、率直に話させていただき、皆さんと忌憚無く意見交換ができればと思っていますので、宜しくお願いします。

お互いの関係の中で歴史をどのように引き継ぐのか語り合いたい 朴麻衣

私は神奈川県で生まれ育った在日コリアン3世です。植民地時代に母方の祖父母が職を求めて日本に来ました。父親は日本人です。祖父母の代から朝鮮籍でしたが、韓国に往来するため大学時代に韓国籍を取得しました。本名は朴ですが、日本名“新井”を持ち、小学校の頃に受けた差別体験から日本名を名乗り、自分が“朝鮮人”である事実をひた隠しにしていた時期があります。

その後高校1年の時に、外国人登録法で強制されていた指紋押捺を拒否し、当時、法的身分の差別の象徴であった指紋押捺撤廃運動に関わりましたが、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)を訪問するために、指紋を押捺せざるをえなかったという経緯がありました。(当時、押捺拒否者は海外に渡航すると日本への再入国が認められませんでした)。北には母の妹が暮らしています。両親の出身、国籍、名前、所属するコミュニティ、朝鮮学校の出身であるか否かなど、“在日コリアン”と、ひとくくりと言ってもそこには実に多様な個別体験とアイデンティティの成立過程があります。

和光大学の在学中、私は幸運にもその多様な在日コリアンの友人と出会い、そして“日本人”の友人や先生たちと“在日”が抱える問題を自分を開示して真摯に意見を言い合う環境に恵まれました。“在日”が抱える問題はまさに“日本人”の問題であり、加害と被害の関係、自分が“日本人”であることを問うことにもなりました。お互いにとってしんどい作業ながらも、和光大学では本当に熱く語り、発見し合っていたと振り返ります。

今年は母、朴壽南が監督をする「慰安婦」被害者のドキュメンタリー映画『沈黙』の製作に身を置きながら、私はいま、植民地時代の日本と朝鮮半島の歴史をどのように引き継ぐのかという問いにぶつかっています。しかし中々、互いに自分に引きつけて話しあう機会がありません。今回語り合う場を与えて頂き、様々な話が飛び交うことを楽しみにしています。